



永生会 研究開発センターニュース

第22号

来年在皆様方にとって飛躍の年となりますように

研究開発センターニュース編集委員
石濱 (6151) / 井出 (6154) / 星本

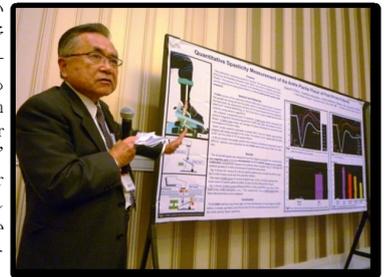
発行日 平成25年12月21日

千野直一

学会報告 平成25年7月以降

AAPMR The American Academy of Physical Medicine and Rehabilitation Washington, OCT. 3-6 2013

世界で最も歴史のあるリハビリテーション医学会であるAAPMRにおいて、当センターで開発を進めてきたE-SAMによる痙縮評価について、千野センター長を筆頭に発表を行いました。"Quantitative Spasticity Measurement of the Ankle Plantar Flexor of Post-Stroke Patients"と題した私どもの発表は、500題以上の演題から、"Best Neurological Rehabilitation Research"の6演題に選出されました。米John Hopkins大学のJ.B Palmer教授など著名なAudienceも参加される満員の会場の中で、発表者は、"E" of E-SAM has two meanings; one is electric, other is "Eisei" which is our hospital...とプレゼンされ、笑いを誘いました。ポスター写真を撮らせてほしいなどの要望もあり、E-SAM展示会場では、複数の米有名大病院等から購入照会・希望があり、わざわざ噂を聞いて本開発機器を目当てにブースに立ち寄られた方もおられ、国際的にも関心を集めていました。



学会終了後に訪問したニューヨーク近郊で100年の歴史を持つリハビリ病院であるBurke Hospitalの先生方、ご案内頂いたMIT Univ.のHermano Igo Krebs教授ともディスカッションの時間があり、E-SAMに非常に高い関心を示されていました。

第9回 神経・筋疾患に関するボツリヌス治療研究会 (2013年10月26日 東京イノホール 参加者約100名)
ボツリヌス治療の関連専門医が集まる研究会であり、当法人から千野センター長による特別講演「BTX-A注入部位と痙縮の定量評価」、講演「ボツリヌス治療とリハビリテーション」(石濱)が発表されました。
ボツリヌスとリハビリ治療研究会 (2013年12月7日 東京 丸ビル 参加者約200名程)
ボツリヌス治療を投与後リハビリテーションを含め多職種で考えていこうという趣旨の研究会(初回開催)。医師とコメディカルよりの発表・シンポジウムが行われ、投与後リハ開始時期や多施設多職種間連携に関してのディスカッションが活発に行われました。当法人からは、講演「ボツリヌス治療に関する痙縮評価法」(石濱)が報告されました。

第28回日本リハビリテーション工学カンファレンス(8月22-24日 岩手)
「住まうまちに求めること 一南多摩福祉機器展来場者アンケートより」(石濱)
第19回日本摂食・嚥下リハビリテーション学会(9月22-23日 岡山)
「多系統萎縮症の病型による嚥下障害の病態の相違」(大高他)
「高齢嚥下障害者における最大咳筋力(Peak cough flow)評価の意義」(金澤他)
「嚥下障害臨床におけるPCFとPEFの意義の検討 両測定値の比に着目して」(近藤他)
「咳筋力と開口力との関連性についての検討」(石山他)の4演題を発表。
第28回全国デイケア研究大会(9月28-29日 仙台)
「できる!を手助けする—電子辞書の使用を習得した利用者—」(平野他)を発表。
第55回全日本病院学会(11月2-3日 埼玉)
「嚥下食対応一覧表の作成～シームレスな栄養管理のために～」(野本他)等4演題
第32回関東甲信越ブロック理学療法学会(2013年11月14-15日 都士会 幕張)
「T字杖の使用が重心動揺・荷重率に与える影響」(笹井他)
第43回日本臨床神経生理学会(11月7-9日 高知)
「片麻痺患者における上肢到達運動の定量的評価」(大高他)
第21回日本慢性期医療学会(11月14-15日 東京)

「慢性期のリハビリ医療」(シンポジスト千野直一)他、当法人より32演題の発表あり。
医療の質に関して、「TQMセンターの活動報告 新たな質の向上へ」(境野他)、「医療介護福祉士認定講座における実習への取り組み」(齊藤他)、「看護管理者として高齢者虐待防止を考える」(安西他)、「人工呼吸器装着者の入浴への試み」(諸江他)、「介護保険施設における経管栄養とミトン使用の関連性の検討」(石濱他)など、**地域包括ケア・連携**に関して、「永生会における地域包括ケアの取組み」(渡邊他)、「当法人におけるボツリヌス治療患者動態をふまえた施設間連絡箋の試み」(金森他)など、**摂食嚥下・栄養**に関連して、「嚥下食ピラミッドに基づいた嚥下食対応一覧表の作成」(野本他)、「慢性期病院でのNST活動と加算」(田邊他)「末期胃癌で経口摂取困難でありながら家族と一緒に味を楽しむひと時が持てた一例」(福岡他)など、**リハビリ**に関して、「要支援者の2年間に於ける転倒の発生と片足立ち時間の関連性」(小倉他)、「療養型医療施設から回復期へ転院し、日常生活活動および要介護度の改善が得られた一例」(小林他)、「訪問リハビリを軽快終了した要介護高齢者における疾患の影響」(星本)など、**災害対策、情報連携、高齢者画像検査、排泄介助、リハビリ旅行**等、発表は多岐に渡った。

リハビリテーション・ケア合同研究大会2013(11月22-23日 千葉)
「ケアマネジャー対象のリハビリテーションに着目したケアプラン作成演習による研修会の試み」(井出他)
「スマートフォンなどの加速度センサーを利用した身体バランス計測データの信頼性」(角谷他)
「パジャマ症状を呈した症例への車いす座位姿勢改善に向けたアプローチ」(土屋他)
第9回日本シーティング・シンポジウム(11月23-24日 東京)(大会長 岩谷清一)
症例報告3題として、認知症患者の褥瘡に対する多職種連携(西宮他)、回復期病棟における褥瘡への対応(山内他)、若年脳卒中者への車椅子の適合(中里他)、調査研究として、シーティングのFIMによる効果判定(石濱他)をテーマとした4演題の発表。
第37回日本高次脳機能障害学会(11月29-30日 鳥根)
「呼称、復唱、音読に迂言が観察された一症例」(西澤他)。
第17回作業科学セミナー(11月30日～12月1日 福島)
「何もせず経過してしまっただけ」という状況から再び作業従事していく過程へも嚥下出血後の女性を通して」(中本他)

記事等



読売新聞2013年12月1日号



QOLサービス 月刊デイ 2013.10月号
参加者全員が旅の目標を立てる 日帰り・泊旅行 袴田真幸・荒尾雅文



医学書院 訪問看護と介護 2013. vol18 No.11
「機能」だけでなく「満足度」も高める 日常的な支援者 = 家族の思いに寄り添って 山本徹



第11回 看護師とコメディカルのための FIM講習会 基礎編・応用編
(平成25年7月7日 杏林大学・NPO法人東京多摩リハビリティ・ネット共催)

基礎編203名
応用編61名 参加。
今回は平成26年7月開催を予定しております。受付開始後、早めの申し込みをお願い致します。

